

私の意見論評

明日の『環境滋賀』を考える

地球温暖化防止活動推進員
上原 一次

琵琶湖に住む魚たち

琵琶湖に古くから住んでいた淡水固有種の魚は六十種程度と言われていますが、現在ではその中の多くは琵琶湖博物館以外では見ることができません。今や、琵琶湖の水面上は外来魚のブルーギルとブラックバスに占拠されていると言っても過言ではないでしょう。特に南湖は甚だしい実態です。もしこのまま放置すると、琵琶湖で生育する魚類の生態系はどうなるのでしょうか？

最近県農村整備課に『魚のゆりかご水田プロジェクト』が設置され、その実験結果として一六アールの水田で約八万匹のニゴロブナが育っていることが確認されています。幸いなことに、滋賀県では『環境こだわり農産物認証制度』が二〇〇一年度より施行され、農薬や化学肥料の使用を削減して環境負荷を少なくする技術ができていたり、水田の圃場整備もほぼ完了しているため、一筆排水口の構造にすることでニゴロブナの遡上を可能にし、一時的水域での魚類の繁殖育成は充分期待できることが証明されています。近江米の生産と並行してニゴロブナが復活し、近江食文化の代表でもある『ふなずし』が、一般庶民の食卓の定番になる日が来ることを願っています。

京都議定書の早期発効

二〇〇〇年四月七日、八日大津市において、G8環境大臣会合の機会に並行して、地球温暖化防止シン

ポジウム「DON'T KILL京都議定書」が開催され、これに参加いたしました。その成果として、「おみ宣言」を採択し、同年七月に開催予定のG8沖縄サミットにおいて議題の一つとして議論する要請が満場一致でなされました。しかしながら、莫大な費用を投入した沖縄サミットでしたが、京都議定書に関して一言も触れることなく社交辞令的なサミットで終了しているのです。G8環境大臣会合開催県として残念でなりません。日本政府の外交の弱さ、幼稚さを他の先進国に示したことになりました。G8環境大臣会合や世界湖沼会議が大津市で開かれた意義を、NPOや有識者だけでなく広く県民に徹底して啓発すべきことがやや不足していたのではないのでしょうか。京都議定書についての論評は、当時は新聞やTVのマスコミで取り上げられていましたが、昨年九月十一日のニューヨーク同時多発テロ事件後はなぜか論議から消えつつあるのが気になっています。

地球温暖化防止のための京都議定書の早期発効はまさに政治問題でもありますが、環境先進県である滋賀が率先してこれを国民運動として、国民の支持により日本政府が揺るがない方針で対処するように行動を起すべき時期ではないでしょうか。今二十一世紀の入り口に立っていますが、環境の悪化は依然として進行する一方で、天然資源も枯渇しつつあり、未来を担う世代の人たちの生活基盤が脅かされている状況にあります。我々がこの地球に住む限り、地球環境を守っていく義務があります。個人として、『環境こだわり県民』である自負を常に意識して、その意識改革啓発の輪を県民各階各層に周知徹底し、継続して実践していくことが、まずは第一歩でありましょう。さて、そこで私たち一人一人ができることは何なのか。私は淡海生涯力レゾの実習で、「わが家の電気使用量の削減」に取り組んだことがあります。十名のグループの中で、対前年同月より減量できた人は三名だけでした。私は電気ポットの使用を中止して、普通の魔法瓶に切り替えた結果、対前年一六%の電気使用量を削減することができました。市民の一人一人がライフスタイルを、また少しエコロジカルにすることを実践すればトータルとしての成果は大きく、グローバルな問題でも地域や地区といったレベルで実践することで、その糸口が見えてくるのです。今後は地域リーダーとして、率先して行動を起こして行きましょう。今

は、出る杭は支援される時代なので
す。

まちづくりと環境問題

滋賀県の地形は琵琶湖を真ん中に
周囲が山に囲まれていて、言わば一
つの小宇宙のようだとはいわれていま
す。県境はすべて山の中にあります。
この山、森林を源流として多くの河
川が琵琶湖に注いでいて、まさに
「森は湖の恋人」と言えましよう。
河川の経路沿線に広がる水田や農村
集落には、原風景としての自然があ
ります。二十一世紀はこの自然環境
に目を向けていく時代です。

滋賀県では、環境こだわり県を目
指していくなかで「びわ湖地球市民
の森づくり」が野洲川廃川敷でスタ
ートしています。県レベルの森づく
り運動として、また子供たちの環境
体験学習の場としてのプロジェクト
が進められています。時代を担う子
供たちが学校教育の場を離れて体験
しながら環境を学ぶことは重要で
す。その一環で、京都と滋賀が相互
に助け合い、その情報の交換や体験
型環境教育を提供する場として、京
滋の大学の先生や行政がパートナー
となつて、京滋体験型環境教育研究
会が設置されているところです。
二十一世紀はコミュニケーション

から始まる「環境の世紀」とも言わ
れ、滋賀県においては『世界湖沼会
議』に続いて、『第3回世界水フォー
ラム』が二〇〇三年三月に京都市を
中心とする滋賀、大阪の琵琶湖・淀
川水系地域で開催されることになっ
ています。また環境新産業振興とし
て、毎年『びわ湖国際環境ビジネス
メッセ』も長浜ドームで開催される
など、環境こだわり県として環境学
習が専門的に受けられる機会が滋賀
にはたくさん仕組まれているのです。

二十一世紀の幕開きである二〇〇
一年に「湖国21世紀記念事業として
夢々舞めんと滋賀」が県内各地で展
開されました。実に二二五のグルー
プが、まちづくりのヒントとなるユ
ニークでオリジナルな活動を催しま
した。しかしながら、単に思いつき
だけの一過性のもも多くあつただ
けに、地域住民が参加・参画して継
続され、特色のある持続可能なまち
づくりにすることが大切だと思いま
した。

県土の五〇%が森林・山である滋
賀には、長い間人の生活にかかわっ
てきた里山があります。古くは、農
村コミュニティの共同の財産区とし
て里山の保全や水田水利権を集落の
宝として守る実態があつたことを考
えると、個人としてはできなかった

こともコミュニティでは実現可能で
あり、持続可能なまちづくりの原点
もそこにあるのです。

森林の中に堆積される落ち葉と生
ごみを混合発酵させてたい肥にする
とか、森林木の廃材からエネルギー
となり得る物質を創造するなど、森
林の未利用資源を有効に使うエコシ
ステムにすることで、現代的なエコ
ライフを小規模分散型で推進啓発し
ていくこともよいと思います。滋賀
ではその活動を推進・実現していく
ための施策力等は充分持っているは
ずですし、環境に配慮したまちづく
りの情報源を発見することもできる
のです。今すぐに役に立たないこと
であつても、将来の環境滋賀への期
待を残すことが現代を生きる人の使
命でもあります。

県行政では、今後の二十年で昭和
四十年代初めのような水質を持つ美
しい琵琶湖に戻すべく、また次代へ
引き継ぐことができるようにいろいろ

るな施策が講じられています。しか
し、全国一の人口増加県でもあり、
現状維持するだけでも難しい状況に
あります。加えて、案外忘れられて
いるのが雨水の問題です。目には見
えない地上の汚染物質が、雨水に混
ざり一斉全面的に琵琶湖に流入して
いることも現実に緑り返し起こって
いるのです。この雨水を貯留して、
生活のライフラインとして利用する
ことも地域や共同体単位であれば、
充分に実現可能です。これからのま
ちづくりは小規模分散型レベルで、
実践するための創意工夫が必要でし
ょう。

以上のことはほんの一例にすぎま
せんが、これらのことを総合的に考
えますと、「エコ村ネットワーク」
がめざす環境、福祉教育、生きがい
等々の問題を自律的に解決すること
のできる村、環境滋賀の理想郷とも
いっべき「エコ村」が滋賀の地に誕
生することを期待するものです。

「ニューエコビジネスの取り組み 生態学的経済発展を望む」

淵本電設株式会社 代表取締役
淵本 義彬

地球の大自然を自分なりに勉強さ
せていただくとき、幾度となく出て
くるのが「生態」という言葉です。

さつそく辞書で語源を調べてみる
と、「生態とは」という説明のほか
に、「生態学」「生態系」「エコロジ

ー」などの関連語句も載っています。我々が住んでいる地球は、この生態系の絶妙なバランスによって保たれているわけです。ほんの些細なことでも知らない間に、生態系にとって非常に大きな影響を及ぼすことになり、バランスを崩すことになるのです。たとえば、琵琶湖には過去にいなかった、あのブラックバスやブルーギルという魚が、琵琶湖の生態系に影響を及ぼしていることが挙げられます。そしてこのようなことは、社会経済においても言えるのではないかと思います。

さて、現在はデフレなどと言われていますが、企業はその技術力・企画力・宣伝力で社会の複雑多岐のニーズに応え、さらに新たなニーズをも創り出してきました。そして、その利益は税金として国へ納められ、雇用対策としてその税金の一部が還元されているのです。我々が今日このような便利な生活を送っているのも、まさにその恩恵に他なりません。その上、この当たり前の生活は企業が創り出してきたことは言うまでもないことなのです。

私自身、過去に遡って考え思い起こして現在社会を見てみると、いろ

いろなことに気づかされます。毎日飲んでいる牛乳や食べている卵、乗っている車や住んでいる家などを以前と比べてみると、味や質、性能や建材にいたるまで格段に良くなっています。これは大きな変化です。私が小学生の頃は、牛乳と卵といえば近くの乳牛を飼っている農家へ、また鶏舎へと、飲み物の瓶が粉殻の入った重い物力ゴを持たされて行った記憶があります。車といえば田舎ではせいぜい軽トラックの中古が普通でした。また夏の夜を過ごすには、蚊を防ぐ蚊帳と一家に一台か二台の扇風機があれば充分でした。父の飲んでいたビールといえば瓶ビールで、近くの酒屋がビールを持ってきてその帰りに空になったビール瓶を返すといった具合でした。今のドイツのリターナブルシステムのようなものです。

今話したことはずいぶん昔のことと思われるかもしれませんが、わずかか三十年前のことなのです。その当時は、ゴミは少ないうえ川はきれいだったと記憶しています。近年よく言われている再利用やリサイクルといったことが、自然に実践されていた結果でしょう。しかしながら、

人々は生活の便利さを求め、消費使い捨て社会を謳歌してきたのです。その結果が、たとえば身近なところでゴミ問題という弊害として現れてきています。一部の心ない人たちが道端、空き地、河川の堤防、公園、湖岸等至る所でポイ捨て(不法投棄)するのでゴミの山です。そしてそのゴミの後始末をボランティアの人たちが行ったり、行政が貴重な税金を使って回収し、処理をしているのが現状なのです。このスパイラル現象を、どこかで止めるために効果的な対策を打ち出さない限り、いくらお金を投入しても足りません。

今こそ本当にこの状況を深刻に受け止め、考え直す時期がきているように思います。しかし、顧客ニーズが「環境のために」と意識を変えない限り、また行政がそれらをバックアップ及びサポートしない限り環境にはマイナスとなり、その解決には莫大な資金が必要となるのです。以上話してきたことから、一個人としてまた事業を営む者として、今後の経済発展を考えるとき、必ず頭に入れておかなければいけないことが「生態学的な経済発展」であると強く思っています。

ところで、私は今「ニューエコビジネス」の「住宅用太陽ひかり発電システム」の普及に全力を尽くしています。これは、すでにみなさんが日常的にお使いの電卓などに利用されている「太陽電池」のことで、自宅の屋根に太陽電池を設置し、太陽の光を電気に変え自給自足できるシステムです。今では、太陽電池パネル自体が屋根材にもなって利用されているので、ご存じの方もおられるでしょう。

そこで、私流の「生態学的な経済発展」から考えあわせてみますと、太陽電池を商品化するにも多くのエネルギーを要しますが、これを日本国内の一般家庭に設置した場合、約三年間でつくられる電気エネルギーで相殺できるものなのです。あとは太陽の光エネルギーのみで電気が発生されるわけで、ほとんど無限に近い供給ができ、人類史上最もクリーンなエネルギーだといえます。もちろん、環境に良いのは言うまでもありません。そのような理由で、この仕事はおそらく私のライフワークにもなるでしょう。

【URL <http://www.pat-hi-ho.ne.jp/sunsun/>】